

# 自己・環境・他者がかかわりあうことによって生まれる表現

## ～造形的な表現活動を通して～

西原 有香莉

本研究では、「自己」「環境」「他者」の三項間の様々な対話に着目し、それらの対話を通して、子どもたちが主体的にその表現を探求できる題材開発を試みた。具体的には、粘土を素材とし、“素材に身体感覚で自由にかかわる「造形遊び」と、“「立体」として立ち上げるための基本的技能の二者を有機的に関連させながら”の探求を目指している。そのために、上記の様々な対話を可能にする「モンスター」という主題を設定し、対話を活性化させると共に、子どもたちの主体的な探究を可能にする手立てとした。

**キーワード：**対話性、土粘土、主題性、基礎基本

### 1. 研究の目的

図画工作科における表現の学びでは、一般に作品を完成させることに目標があるのではなく、そのプロセスの中に学びを見出してきた教科である。本研究では、「自己」「環境」「他者」のそれぞれが関係し合う中で生まれる対話が、そのプロセスを生むものと考えている。

#### 1. 1. 造形活動における対話

子どもたちは、素材や材料とかわることによって造形活動を行う。ここでいう素材は図画工作科の表現のために整えられたもの（絵の具、画用紙、粘土など）だけではなく、樹木や土、石や水などの自然物も造形活動の素材となる場合がある。このことから自然物を含めた広い意味での「環境」とのかかわり合いの中で子どもたちは造形活動を行い、「環境」との出会いを果たしていく。

感性を働かせ対象と向き合って、感じ、表そうとし、そしてまた感じ、といった一連の行為がくり返される造形活動の中には、多様な対話がある。子どもたちが、素材や空間、場といった「環境」と出会い、柔軟な身体感覚を働かせ、向き合い、活動する中で、自分の中に生み出され続けていくイメージを表す行為は、「自己」や「環境」との対話のくり返しによって成立する。そこに「他者」との対話が絡み合うことで、自分らしい表現をつくり出すことや、つくり出すことへの喜びを生み出すことに、大きく作用すると考える。

#### 1. 2. 学びを自ら生み出す造形活動

「自己」と「環境」との間の感覚や言葉による様々な相互作用の結果、形や色によって形づくられた作品が生み出されていく。この「作品」は、学びの結果であると共に、子どもたちの学びをその都度「対象」化して映し出すことができる。さらにこの「作品」は他者の作品と比べられ、語られ、影響を相互に与え合うことで、次元の異なる「かわり」を生むことを可能にするだろう。

「自己」「環境」「他者」が感覚と言葉によって複雑に関係づけられることで、自分らしい表現に向かい自分なりの学びの目標や目的が生まれていく。つまり、かわり合う中で学びの対象を自ら生み出していくと考えた。

以上のように、その対話の深まりと広がりによりよい学びを生むと考え、題材を開発し、その検証を試みている。

### 2. 研究方法

多様な対話がくり返されるためには、感性豊かな子どもたちが生み出すイメージに回答可能な素材が必要である。また、造形活動に夢中になると、他者の表現に目もくれず自己の活動に没頭することが、本実践の対象児（第3学年）には多く見られた。このような姿ももちろん認め大切にしていきたいが、「かわる」ことで新たな表現が生み出される場を、本研究では大切にしたい。そのような実態から、教科提案にもある「比べる」ことをはじめとする、対話と相互批評のしかけが必要である。この2点を踏まえ、粘土による「モンスター」の造形を設定した。子どもの想像力を刺激する「モンスター」という主題は発想をより豊かにし、その造形に粘土をつかうことでイメージ創造のより深い追究を可能にすると考えたからである。実践の主張について、以下に述べる。

#### 2. 1. 粘土の魅力と造形性

粘土は、子どもたちの発想に対して柔軟に応えることができ、自分なりの表現を生み出そうとする思いを受け止め支えられる素材である。押したり、ひっかいたりして素材に働きかけると、それに回答するかのように形態が変化し、それはまるで粘土の素材と会話をしているかのようでもある。また、子どもたちの働きかけを、より一層受け止められるものを模索した結果、本実践では、土粘土を使用した。土粘土は、少しひんやりとした湿り気やほどよい弾力があり、その手触りや質感は、心地よさを覚える。

また、粘土は学習指導要領において低学年中心に扱う素材であると明記され、「両手を十分に働かせ感触や手ごたえを楽しむ体験を行うこと」とされている。低学年における粘土の素材自体を味わう造形遊びの活動は、自然体験が十分にすることができない環境におかれている現代の子どもたちにとって、本来子どもたちが持ち合わせている豊かな感覚世界を取り戻すきっかけとなると考

えた。大人以上に世界を感覚的に受け止める子どもたちにとって、このような素材体験はとても重要なのである。感覚世界での体験は、新たなイメージをもつことにつながり、創造の世界へつながっていく、いわば学びのスタートになるともいえる。そのような粘土を中学年で扱うことで、低学年での素材体験から、さらに発展的な粘土造形の活動を期待できると考えた。

## 2. 2. 「モンスター」のテーマ設定

妖怪や精霊、怪物とも言い換えることができる「モンスター」は、ギリシア神話に登場する「キメラ」のように、様々な生き物の集合体のように発想することもできる。子どもたちは、自分が知る生き物のそれぞれの特徴を思い出しながら組み合わせたり、また自分なりに形態を変化させたりして「モンスター」を創造することができると思ったからである。

また、発想の基となる生き物は、“へビ”や“キツネ”などのように言語として子どもたちに内在すると考えた。このことから、言語がより豊かな発想・構想を支える手立てになるともいえる。言語が活動をより豊かにするもののひとつであることから、子どもたち一人一人が生み出した「モンスター」の形態について互いに物語り始める会話が重要となる。その会話によって互いに刺激を受け、新たなイメージを持つことにもつながると期待した。

さらに、この会話をより一層深めるために、「モンスター」を生態や具体的な生息場所などから考えつくりだすことにした。この活動によって設定したストーリーから「モンスター」の形態に特徴を与え、その形態に子どもたちが意図を持ちながら活動できる。それぞれの思いが表れたかたちに、子どもたちはこだわりをもつことになる。そして、そのかたちへの思いはやがて「周りの友達へ伝えたい」という気持ちを引き出し、それぞれのかたちの表現についての会話がかわされる。このそれぞれの思いの詰まったかたちについての会話が、やがて自分だけの造形的表現への意欲を生み出し、さらに豊かな表現活動へとつながると考えた。

## 2. 3. 立体にするための基本的な技法に関する学びが多様な造形的表現へつながる題材計画

本実践では、子どもたちが造形遊び的な粘土の素材体験の活動を行う中で、基本的な技法についての学びも取り入れた。例えば、筒状にしたり、パーツを積み木のように積み上げたりなどである。そして、より多様な創造活動を生み出すために、切り糸や粘土へらなどの道具も用意する。それらの道具の活用や基本的な技法を造形遊び的な活動の中で十分体験することで、「モンスター」づくりの際により発展的な造形的表現を問いつける姿がみられることを期待した。(表1)

題材計画〈全9時間〉		
1次	1・2	○粘土でどんなことができるかな？ ・土粘土の特質や切り糸やかきべらの用具の使い方と、その活用の仕方を体験的に学ぶ。 ・粘土によってかたちづくることのできる基本的なものから、つなげる、積む、くっつけるなどの作用を加えることで粘土による表現が広がることを体験する。
	3・4	○粘土を立ち上げてみよう！ ・前時で体験した表現をさらに発展させ、ふくらみをもたせたり高く積み上げたりする表し方をさぐる。
2次	5・6・7	○発見！かくれモンスター！！ ・校内を探検し、モンスターのかくれていそうな場所を探す。 ・見つけた場所からイメージを広げ、モンスターの形態を考える。 ・粘土でモンスターを制作する。
	8・9	○3Aモンスター大集合！ ・制作したモンスターを実際に発見した場所に置き、自分のモンスターについて伝え合う。 ・3Aモンスター図鑑をつくる。

表1：『発見！かくれモンスター！！』

## 3. 授業の実際

子どもたちがもつ発想の豊かさは、素晴らしい。その力がモンスターづくりにおいて十分に発揮され、より豊かな造形的な表現活動が見られるためには、土粘土の特質を知ることやイメージを実現させるための基礎的な技法を学ぶことが必要である。そこで、モンスターづくりの題材までに、立体で表現するための基本的な技法を学ぶ活動を前題材として設定した。その題材では、「造形遊び」を基礎的な技法を習得するための活動として位置づけ実践を行った。「造形遊び」は、基礎的な技法だけでなく、土粘土の特質についても体験的に学ぶことが可能になると考えたからである。

授業の実際を、前段階の題材である「造形遊び」から本実践の粘土によるモンスターづくりの題材に至るまでを、以下に振り返っていく。

### 3. 1. 土粘土の特質や造形のための基本的な技法を体験的に学ぶ

#### 3. 1. 1. 『粘土でなにができるかな？』

ここでは、土粘土の特質や切り糸やかきべらの用具の使い方と、その活用の仕方を体験的に学ぶことや、粘土によって形づくることのできる基本的なもの（だんご、ひもなど）から、つなげる、積む、つけるなどの作用を加えることで粘土による表現の広がりを体験することをねらっている。

子どもたちは、油粘土による表現活動は何度か体験してきているようである。しかし、土粘土を体験したことのない子どもがほとんどで、土粘土を触った瞬間、「つめたい」「冷蔵庫で冷やしていたの」「やわらかくて気持ちいい〜」といった声が挙がっていた。手の感覚を働かせながら土粘土に挑み、切り糸で粘土が切れていく感覚を楽しんだり、切った切り口の模様のきれいさに気付

いたりしながら、黙々と自分なりの表現を追究し活動を楽しんでいる姿が見られた。(図1)

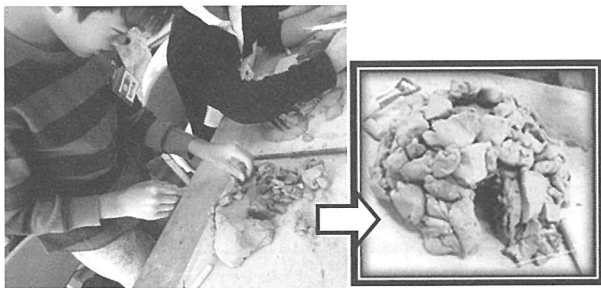


図1：自分なりの表現を追究し「試打」姿

**活動の様子**

- 土粘土にふれることで、形の変化を見る
  - こねる、押す、叩きつける、丸める、伸ばす、細くする
- 用具の動かし方を様々に試す
  - 【粘土へら】
    - 掘る、薄く削る、持ち方をかえる(ななめ、垂直にたてる)、穴を空けるようにに削り出す
  - 【切り糸】
    - 糸の貼り具合をかえる、切る時の動かし方をかえる、糸を巻きつけて引っ張る

初めは一人だけで活動をしていたが、友達の表現のよさに気付くと、その表現の工夫をまねしてみたり、また、机をくっつけて会話をかわしながら活動したりする姿も見られた。そして、自分と友達の粘土を合わせて、一緒に造形活動を楽しんでいた姿もあった。(図2)

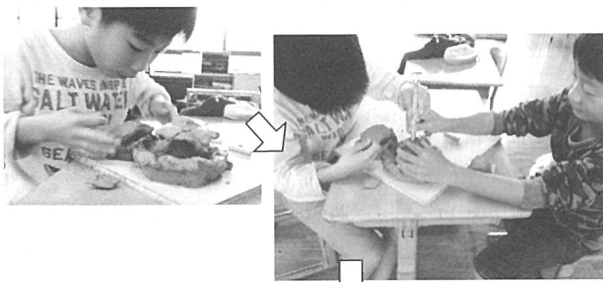


図2：自分と友達との表現の違いやよさに気づく姿

**活動の様子**

- 個々の造形活動やかたちづくったものをじっくり見合う
- 造形の方法やかたちづくっているものについて質問したり答えたりして会話をかわす
- 互いの持つイメージについて語り合いながら、一緒に活動する

図2の活動における会話を以下に記す。

ある子どもが初めは一人黙々と活動していたが、ふと手を止め友達の活動を見た。

しょう : ぼくのと合体させよう!  
 だいすけ : じゃあ、滑り台でつなげようよ。  
 しょう : 秘密の抜け道みたい。  
 だいすけ : もう少し掘った方が隠れていいよ。  
 しょう : 怖い魔女が住んでそう。魔女の秘密の遊び場! もっと隠れるように粘土をかぶせないと…

このように、互いのイメージについて語り合いながら造形活動をする中で、さらに新たなイメージが生み出されていた。

**3. 1. 2. 『粘土を立ち上げてみよう!』**

低学年の間は、粘土で生き物をつくる際、粘土を平らに伸ばし、平面で表現しようとするのがよく見られる。そこで、粘土による表現活動が立体で行なわれるよう、基本的な技法を基に、高く積み上げたり厚みを持たせたりする方法を模索する活動を設定した。試す中でいくつかの方法を発見できていた。

**子どもたちが生み出した立体的な方法**

- ・ひも状にして…重ねる、巻きつける
- ・平らにして…まるめる、ふわっと包む、重ねる
- ・団子を積み重ねる
- ・積み木のようなパーツを積み重ねる
- ・少しずつ粘土を押しつけていく

それぞれの活動を見合い、試してはつぶし、こねることで粘土を整え、また、試すといった作業を繰り返す姿が見られた。(図3)

また、(図3)の左上は、紐状にしたものを重ねていくことで、粘土に厚みを持たせていったものであるが、「メリーゴーランドみたいになったよ」と見立てを行いながら造形を楽しむ姿も見られた。



図3：土粘土による立体的な表現方法を様々に試す姿

**活動の様子**

- 紐状のものをたくさん作り、積み重ね方を色々試す
- 友達の考えた表し方を試し、更に発展させようとする
- 積み木のようなパーツや団子を積み上げても、崩れないような重ね方やつける際の力の入れ具合を模索する
- 平らにした粘土をふわっとまけるように、指先の動かし方や力の入れ具合を考える
- 無意識的にできたかたちを「△△みたい」と見立てる

### 3. 2. 感性豊かに他者や環境にかかわることで自分らしい造形的表現力の獲得を目指す

#### 題材『発見！かくれモンスター！！』

子どもたちは、アニメやゲームなどでモンスターを目にすることが多い。また、それらの中に登場するモンスターは、わたしたち“ひと”が住む世界の中に現れるという設定であることが多い。このことから、「自分たちの身の周りにもいるかもしれない」と考え、校内に潜むモンスター探しをした。今まで見落としていたような、小さな現象が「モンスターの仕業かもしれない・・・」と子どもたちは、蛇口から水がしたり落ち続けていることや、どこからともなく聞こえてくるベルの音などのあらゆる事象に敏感に反応できていた。そして、モンスターがいそうな場所を発見するとモンスターマップ（図4）に印をつけ、活動を進めた。そして、つけた印の中からひとつ選び、その場所に潜むモンスターを3. 1. の題材での経験を生かし、土粘土で制作する。

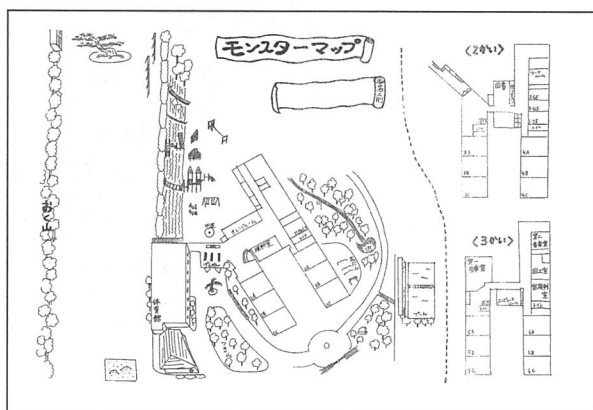


図4：モンスターマップ

土粘土によるモンスターの造形の前に、「モンスター図鑑」と題し、それぞれがイメージするモンスターの形態や性格、生息場所などを言葉や絵で表した。子どもたちのモンスターのアイデアスケッチを見ると、それぞれが発見した場所の特性を生かした形態を考えていた。例えば、図工室で発見したモンスターは、筆の形をしたしっぽがあったり、池の近くに棲むモンスターは、魚のうろこで体表面が覆われていたりしているものである。様々な動物や植物の形態や特徴を体のパーツごとに組み合わせ、モンスターをつくり出している子どもたちもいた。

そして、アイデアスケッチを基に、土粘土による造形の活動に入った。アイデアスケッチの中で、体の模様や、小さなくぼみなどの表現をしようとしているものがみられたため、粘土へらを用意した。このことによって、粘土へらでひっかけ体表面の毛並みを表したり（図5）、開いた口の中の奥行きを表現したり（図6）などの、細かな表現が生み出されていた。

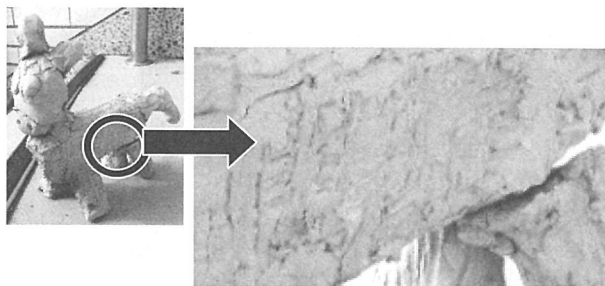


図5：表面をひっかいて毛並みを表現

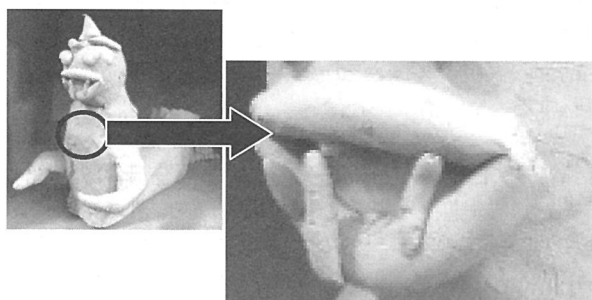


図6：粘土を掻き出して口の中の奥行きを表現

最後に、完成させたモンスターを初めに発見した場所に持っていき、写真撮影した。（図7）



図7：発見した場所で撮影したモンスター

## 4. 授業の考察

### 4. 1. 素材（土粘土）とのかかわり

土粘土との出会いを果たした瞬間、子どもたちは、これまでの経験により培ってきた“粘土”に対する感覚と土粘土のもつ感触が異なっていたようで、とても驚いた様子であった。土粘土に指先でそっと触れたり少し押したりしながら、独特の粘り気や弾力を確かめていた。

そして、徐々に活動が大胆になり、土粘土のかたまりに体重をかけて拳を押しつけたり、机に打ち付けたり、大きな塊をちぎりとったりする姿が見られた。やがて、時間が経過していくにつれそのような姿が減り、次に見られたのは、団子や紐をつくったり、薄くのぼしたり、かきべらで粘土の表面を薄く削り取ったり、切り糸を上下に動かして切り取ったりなどの姿である。これは、単なる土との戯れを超えて、意図的な表現の「技」へと変化しつつある姿なのかもしれない。「これをつくろう」というはっきりとした目的はないが、つくってはこわし、



またこねてつくり、を繰り返すことで、新しい形や表面にできる模様に変化していく様子を楽しみながら、自分の働きかけた行為によって土粘土はどう反応を返すのか確かめているようでもあった。

さらに、活動は個から広がりを見せ、言葉だけでなく行為した結果である土粘土を媒介として、友だちに自分の表現の方法を伝えたり、聞いたりする行動も見られた。このことから、自分の生み出した表現の価値への気づきや同じ経験をしながらも違った感覚を持つ他者が存在することへの興味、そして新しい表現を生み出すことへの欲求が感じられた。土粘土の素材に対し感覚的に挑む中で、基礎的な技法を体験的に習得できていたと共に、土粘土の表現の多様さを感じ楽しむことができていたと実感する。

#### 4. 2. モンスターの主題設定から生まれた対話

モンスター探しの際、「誰も居ないのに、ぶらんこがゆれつづけている」「この水道の水、夏はすっごく暑い時があるんだけど、モンスターのいたずらかな」など、普段は気にとめないような現象を、楽しそうに話す場面があった。また、根上がり松の形のおもしろさや、ずっと前から立ち続けているという事実からイメージをもつ子どももいた。子どもたちは、いつも過ごしている場所に、今までなかった何らかの気配を感じているようであった。周りの「環境」を改めて捉え直し見方を変えてみることで、いつもは通り過ぎていたはずの“もの”や“こと”を特別なものとしてみることができ奥行き深いものになっていたのである。ここに、3年生の子どもたちならではの感性の豊かさを感じると共に、学びの対象を子どもたち自身で生み出した瞬間があったと考える。

また、イメージしたそれぞれのモンスターについて聞くと、どの子もそれぞれのモンスターの形態や性格について詳しく話すことができる。まるで、子どもたちがイメージをもった場所にモンスターが本当に存在し、実際に見てきたかのように語るのである。その語りは、やがて隣の座席の友だちへ、そのさらに隣へ広がりを見せた。

(図8) 友だちと話す中で、また新たなイメージが生まれ、アイデアスケッチを何度も描き直す姿も見られた。「他者」との対話が刺激となり影響し合うことで、新たな発想へつながり、“自分だけが発見した”こだわりのモンスターを生み出すことができていた。



図8:それぞれのモンスターについて語り合う姿

#### 4. 3. 立体表現

「造形遊び」を基礎的な学びとして位置づけ、粘土でさまざまに「試す」時間を設定した結果、その学びが生かされていると感じるかたちが、完成したモンスターにいくつか見られた。確認できた学びの特徴は、以下の2点に分けられる。

- (1) 身体感覚で素材(土粘土)にかかわる力
  - (2) 立体にするための基本的な技法に関する学び
- 以上の特徴が見られた作品の例をそれぞれにあげながら述べたいと思う。

- (1) 身体感覚で素材(土粘土)にかかわる力

図9の作品は、「ふん火様」と名づけられたものである。暑い夏の日、外の水道の水が熱かったことからイメージされたモンスターである。その体表面には、土粘土を粉にしたものがふりかけられている。この作者によると、火山灰をイメージしたとのことだった。土粘土の造形活動を楽しむ中で、子どもたちは、土粘土の“乾き”による色や重さ、感触の変化にも驚きを示している場面があった。

子どもたちは、小さな乾いた粘土のかげらに力を加えるとぼろぼろと崩れ、細かい土の粒子になる様子を楽しんでいた。粘土のずっしりとした塊だったものが、乾くことで土の粉になることが不思議でたまらない様子で、何度もすりつぶしたり、手の平で土の粉をすりあわせたりして、さらさらとした感触を楽しんでいたことが、この表現につながったと考える。

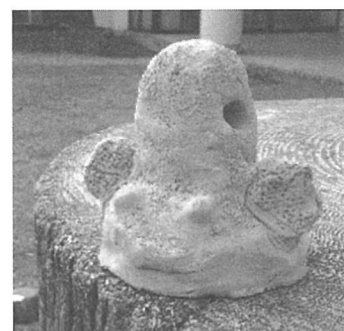


図9:身体感覚で土粘土にかかわることで生み出された表現

- (2) 立体にするための基本的な技法に関する学び

[図10]のモンスターで注目したのは、耳のような部分である。一度平たく伸ばされた粘土が、くるくるとまかれてつけられている。

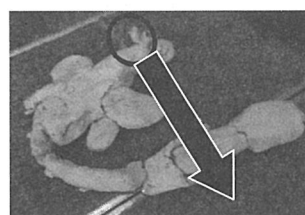


図10:立体にするための基本的な技法に関する学びから生み出された表現

このような表現を、粘土での「試す」時間にしていた子どもがいた。(図11) この子どもも同じ方法で粘土をまるめ、ふくらみをもたせる表現を生み出していた。比べると、両者の表現がとても似ているようである。粘土の基本的な技法の学びが、モンスターづくりに生かされ、また、その中で同じ経験をしていた「他者」の表現のよさを味わうことから、このような表現が生まれたと考えられる。



図11：「試す」時間で生み出されていた表現

## 5. 成果と課題

一言で“粘土”と言っても、油粘土や紙粘土など様々な素材を考えられる。しかし、その中でも今回土粘土を扱ったのは、最も鋭敏に子どもたちの行為を受け止めることができる土粘土ならではの特性に加え、土粘土を形成している土と水という元素的物質が子ども達に働きかける深い力に期待しているからである。子どもたちを取り巻く「環境」に全身の神経を働かせて挑み、そして「環境」から受けた刺激により生み出されたイメージを基にして「モンスター」をつくり出す。その活動や子どもたちの思考の流れに沿うように、ただの土に命が芽吹き新しい生命(モンスター)が誕生したかのような体験ができることも願っていた。実際に、「自己」や素材や場所といった「環境」と対話する姿が多く場面で見られた。

本実践後も、子どもたちは小さな現象に気づき、楽しさを感じている場面が見られるようになった。このことから、子どもたちが本来持つ、感覚の鋭さや繊細さを引き出す上で効果があったように感じる。

また、土粘土の素材自体を楽しみ、そこからモンスターをつくりあげるまでの一連の活動の中には、「他者」との対話に加わることで、自分や友達の表現のよさに気づき、さらに新しい表現を生み出そうとし、自分なりの表現がうみだされることの喜びを感じられていることも実感した。

本研究では、「表現」の領域に関する活動に重点をおき、実践を進めたが、「鑑賞」における学びの可能性も感じた。モンスターを実際の場所にもって行き、写真で撮影したが、そこでは、撮る方向やモンスターの置く場所の細かなこだわりの声を子どもたちから聞くことができた。場所からモンスターを生み出す、それは、場所にまつわるひとつの物語をつくることでもある。そのことにより子どもたちにとって、学校の様々な場所がそれぞれの思いによって想像世界のツールをもち始める。子どもたちは感性を働かせ、それぞれの思いを込めながらも

のを見ることでできていたのである。このような姿から、「表現」における対話が「鑑賞」の能力にもつながることを実感し、今後も、「表現」と「鑑賞」が密接に関連し合いながら学びが深まる研究を進めたいと考える。

## 参考文献

- ・永守 基樹(2003)「21世紀における『造形遊び』の可能性—アヴァンギャルディズムを超えて」『美術教育学会大5怪異西地区会(研究発表会 in 奈良) 概要集『25年を経た「造形遊び」の功罪(新たに切り拓いた道)と(巻き起こした混乱・誤謬)』』
- ・中川 織江(2003)「●粘土遊びの心理学9, 10, 11, 12, 13, 14●」『教育美術 No. 727, 729, 730, 731, 732, 733』財団法人教育美術振興会
- ・板良敷 敏(2002)「『造形遊び』という名の学び その意味をめぐって」『美育文化 2002 7月号 Vol.52』財団法人美育文化協会
- ・神谷 睦代(2009)「幼児の粘土造形—基礎的な技能の習得及び題材(テーマ)についての実践と検証—」『美術教育学会誌 30』美術教育学会